

安楽寺だより

第61号

明けましておめでとうございます

観無量寿経序文

第20回 「王舎城の悲劇」まとめ

観無量寿経の序文にある「王舎城の悲劇」を7回に亘って述べてまいりました。「観無量寿」とは、無量なる寿命(いのち)を観る、限りある人生の現実のうちに、永遠の意義と生命の満足を見いだすことを願わします。

自身の出生の秘密を知った太子アジャセが、父ビンバシヤラ王を牢獄に幽閉し、王位を奪う事件を起こします。王宮での悲劇を解決しようとしたイダイケ夫人の苦悩の深さこそ、お釈迦さまが観無量寿経をお説きになった真意であります。

イダイケは自身の苦しみの根深さに気付き、「阿弥陀仏の世界へ生まれる身にさせてください」と懇願します。

お釈迦さまは、イダイケの願いに答え、阿弥陀仏の世界を見せます。西方の落日によせて、乱れ散る私たちの心を静め、同時に自分自身を深く顧みる『日想観』(につそうかん)から久しく阿弥陀仏の

紙面内容

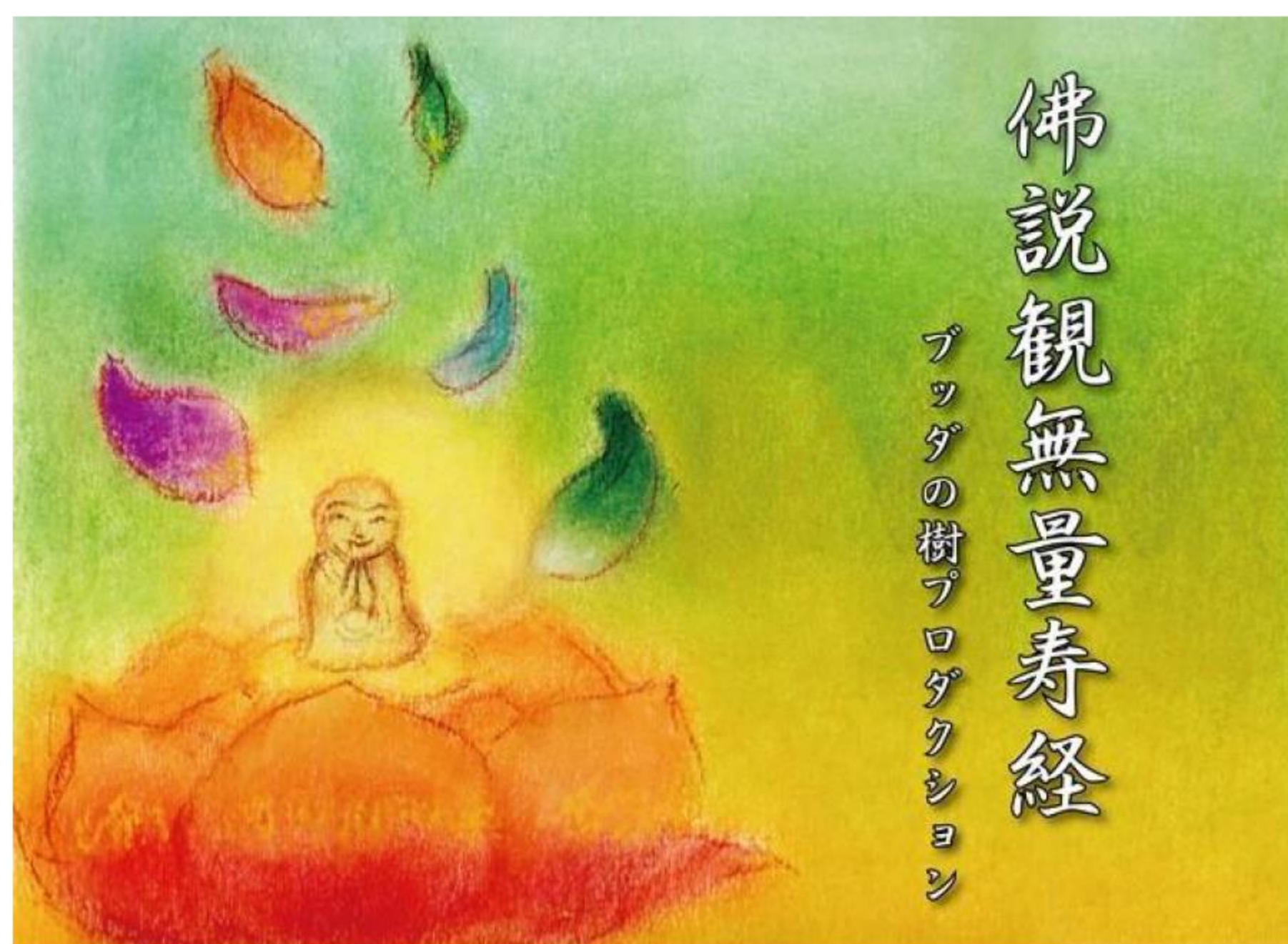
- 2面 観無量寿経の浄土の「観法」
- 3面 本山報恩講に参拝しました
- 4面 暮らしの中の仏教語(玄関)

私には無限の願いがかけられている

深い願いに生かされる事実気付く『雑想観』(づっそうかん)にいたる十三通りの観法というかたちで説かれています。

私たちが生きている事実の背後には、仏様の無限のはたらきがあり、無限の願いがかけられています。今、私のいのちを生かしめるために、数えきれないほどの生物が尊いいのちを棄ててくれているのです。

この事実を当然だと考えている限り、私を生かしている背後の世界に



仏教は私がかげがえのない人生と気付く教え

眼を開くことはできません。お釈迦さまの教えは、私たちのために深く尊い道理を顕かにして下さっていることは、ほとんどの人がうなずかれると思います。

仏教の経典は、決して故人を弔うためや儀式・法要のためだけにあるのではなく、現に今生きている私たちの人生の問題を正しく解決する道を顕かにしてくださる教えです。

「私の一生は、かけがえなく尊い人生でありました」と自分自身に深く頷くことのできる道を顕かにすることが仏教の根本精神であります。

観無量寿経は、人間の本当の在り方に目覚めた仏様の智慧が、いかなる人間をも目覚めさせずにはおかないというはたらき、つまり限りない慈悲として説かれているのです。

お釈迦さまが説かれた、阿弥陀仏の浄土世界の「十三通りの観法」を2面にあらまし述べます。

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良
名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇
電話 〇五二(八四一)二六〇六

お釈迦さまの説かれた 十三通りの観法「前篇」

お釈迦さまは、イダイケの願いに応じて「阿弥陀仏の浄土を観るための十三通りの方法」を説かれます。それは日常のこころを統一し澄みきったこころの状態で浄土のすがたを観ることでもあります。

しかし決して私たちの現実生活から離れた特別の行ではなく、本当に人生の帰依処（よりどころ）の世界を知ることのできる方法といえます。

阿弥陀仏の浄土は、私たちが日常の生活の中で、いつのまにか忘れてしまった真実なるこころの故郷であり、『浄土の観法』によってこころの故郷を回復していく人生の歩みであります。

お釈迦さまは、イダイケに次のようにお説きになりました。

『そなたが阿弥陀仏のみ国を拝見したいと願うならば、まずこころを凝らし、想いを専らにして西の空を想いみるがよい。西の空の果てに沈みゆく入日を想いみるがよい。その入日のすがたを観終わったならば、眼を閉じても開けても、そのありさまがありありとこころに浮かぶ



イダイケはアジャセの救いを願う 日 想 観

ように想い凝らすがよい。やがて寂静の境にすすむことができるであろう』第1観

これは夕暮れの太陽が、すべてのものを深い静けさのなかに包み取っていくように、すべての人びとをひとつに帰せしめる魂の故郷であります。（これを「日想観」と名づく）

その後、お釈迦さまは、「水想観」第2観・「地想観」第3観・「宝樹観」第4観・「宝池観」第5観・「宝楼観」第6観と私たちの生活の依って立つ人間としてのいのちの大地を説かれ、『浄土を観よ』と教えられることにより、各々自身の人生を振り返り、懺悔と感謝とを自覚し、正しい人生観に気付かされるのです。そして『仏はいまこそ、そなたのためにすべ

ての苦悩を除き尽くす法を説くであろう。

イダイケよ。彼の無量寿仏を観たて祀ろうと願うものは、まずはみほとけの立ちたもう座を想い念ずべきである』（これを「華座観」第7観と名づく）

七宝よりなる大地の蓮華台をあらわし、宝珠の光が大地を覆う姿を説かれます。一如平等なる浄土の光の前に、我執の闇の深さが照らし出されます。これは苦悩の人生のなかに、尊さと有り難さを見いだすことができるのです。

そして、イダイケは、かつて一度は「悪子」と呼んだわが子・アジャセの救いの道を求めます。自身の救いを願ってきたところが、平等の浄土の世界の前で、本当にわが子の身が案じられることになったのです。すべての人を平等に救おうという願いをもって、万人に働きかけてくださる仏こそ阿弥陀如来であります。

阿弥陀如来が大悲の本願をみ座として立ちたもうのであります。蓮の花は汚泥の中から美しく咲くように、阿弥陀如来は、衆生の煩惱の汚れを自身に引き受けて立ちたもうものであります。

（次号に続く）

本山報恩講に参拝しました



昨年十一月二十一日、本山京都東本願寺報恩講に団体参拝しました。

今年は法要初日の参拝で御影堂外陣に参列された五十名程の合唱団が、法要式次第に合わせて着座曲・登高座曲を合唱されました。そして末寺の法要で讃題として称えられる『自ら仏に帰依したてまつる』から始まる三帰依文(和訳歌詞)の合唱があり、その後和訳正信偈・念仏和讃・回向と約五十分の歌を参詣者とともに勤めました。



ベコニアガーデンの鉢植えです

京都高瀬川沿いの料亭で昼食をいただいた後、三重県長島温泉なばなの里で散策しました。団体参拝にご参加されました皆様にお礼申し上げます。来年の参拝もご予約いただきますよう、宜しくお願いいたします。

22組 同朋大会を開催



昨年十月十六日、東別院対面所に於いて、二十二組同朋大会を開催しました。



本山音楽法要の合唱

二十二組・小島大真組長から開会挨拶の後、柏田礼子医師により「感染症の基礎知識」と題したお話をさせていただきました。コロナウイルスが発症して間もなく六年が経過します。今なお後遺症に苦しんでおられる方がお見えになります。柏田さんは、医師として医療現場でご活躍をされておられ、どのように予防したらいいのか、最新の感染情報を解りやすく講演されました。休憩の後、二十二組有志コーラス「百歌繚乱」の皆様による素敵な歌声と、坊さん漫才「えしんりょう」による軽快なお話に、参加された皆様の歓声が堂内に響きました。



百歌繚乱の皆様

仏教豆知識

第六十一回



暮らしの中の仏教語

日頃は何気なく使っている言葉も語源や由来は、意外にわからないものです。

3、「玄関」

今から二十一年前の平成十七年(2005年)に中部空港(セントレア)は、知多半島常滑沖の海上に伊勢湾を埋め立てて建設されました。セントレアは、中部地方の空の玄関と言われています。

玄関とはもともと建物の名前ではありませんでした。「玄」は深遠なる道理・真理のことで、「関」は関門であります。ですから玄関とは、玄妙な道に入る関門という意味で、奥深い仏教(仏のおしえ)に入る手始めとか、糸口のことであります。入門講座という言葉がありますが、その門は建物ではありません。「仏門に入る」の門も同じであります。

この玄関という言葉が、やがて禅寺の客

殿に入る門を「玄関」というようになり、寺院の書院の昇降口のこととなりました。

室町時代以降には、公家や武家の邸宅は書院の建築様式を取り入れました。いわゆる書院造りであります。その出入口を玄関と呼びました。江戸時代になると町の名主には、玄関を構えることが許されました。

現在のように建物正面の出入口を玄関というようになったのは、明治時代以降のことです。玄関番・玄関先など玄関の付く言葉は、たくさんあります。「玄関払い」「京都の玄関」「宇宙への玄関」など玄関という言葉は拡がりを見せています。このように仏教語「玄関」は、日常生活の中に浸透していきました。



昨年末、政府は2026年度予算案を発表しました。その中で29・6兆円の赤字国債が見込まれています。▲1947年(昭和22年)に制定された財政法では、公共事業以外の赤字国債を禁じていました。日中戦争以降、政府は膨大な軍事費を補うため「報国債」を乱発し、その結果超インフレになり、戦後、国民生活を困窮させました。その反省から制定されたのが財政法でした。▲その後1972年(昭和47年)のオイルショックによる財源不足を補うため1年限りの国債を発行しました。しかし、高度成長が終わると赤字国債は常態化しました▲高市首相は、物価高対策や防衛費増額のために、赤字国債は「やむ負えない」と表明しています。国債は将来世代の国民に負担を強いるものです。本当に必要なのか衆議院・参議院の国会でしっかりした議論をすべきだと思います。